

(8) 南米の小麦生産事情 - 大いなる発展を秘めた大陸 -

1992年に訪れた南米のブラジル、アルゼンチン、チリ、パラグアイの小麦事情について、その一端を紹介します。

小麦の年間国民一人当たり消費量は、パンを主食とするチリとアルゼンチンは、それぞれ145kg、110～120kg、いも類（キャッサバ、ばれいしょ）、米、雑豆などを主に食べるブラジル、パラグアイでは40～45kg程度（日本は約32kg）となっています。

需給状況については、ブラジルは年間の生産量が3,500万t程度（91年）で、自給率は約5割、これに対してアルゼンチンは、1,100万t程度（91年）を生産し、需要量400万tをはるかに越えており、輸出をしています。チリとパラグアイはほぼ自給できています。ブラジルは88・89年当時は8・9割自給できる状態でしたが、90年に政府の全量買い上げから完全自由化に変わり、価格が大幅に下落したため作付けが激減しました。一方、アルゼンチンは、製粉会社や商社等が直接取引し、国際相場をもとに価格が決められますが、生産コストがアメリカやオーストラリアに比べ、かなり安い（50～60%）ので生産が維持されています。

小麦栽培地帯の気象条件は、ブラジルでは作付けの多くは南部に集中し、年間降水量は940mmで比較的湿潤です。アルゼンチンの小麦は、ほとんどが広大なパンパ地域で栽培されており、降水量は500～900mmで半乾燥から湿潤まであります。チリは首都サンチャゴから南へ1,000kmまでの南北に細長い地域で栽培され、乾燥から湿潤地帯まであります。

最近での単位当たり収量は、ブラジルが1.6t/ha程度、アルゼンチンは1.9t/ha程度であり高くありません。これに対してチリは3.4t上げており、南米で最も生産性の高い国です。その理由として、アンデス山地の雪解け水を利用して灌漑を行っており、窒素の分追肥など栽培技術も高いことが上げられます。技術の高い農場では8～9tの実績もあるそうです。アルゼンチンの場合は、土壌が肥沃なため、施肥は20%程度の生産者しか行っていないとのことで、小麦価格に対して、肥料価格が高いことも肥料を使わない

理由のようです。

作付体系は、チリを除いて大豆の作付けが増加しており、夏・大豆・冬・小麦の1年2作が所得確保の面でも有利で、一般化しているとのこと。

栽培上の障害として、亜熱帯であるパラグアイを除いて、いずれの国でも栽培が冬のため、出穂近くの不稔や穂の奇形など霜害、凍害を受けることがあるそうです。ブラジルでは、土壤が強酸性でアルミニウム障害が大きいとのこと。また、アルゼンチン以外の国では、土壤侵食が問題とされており、ブラジルでは20～30m間隔で等高線に沿って土手を築く方法がとられていました。穂発芽については、収穫時期には降雨が少なくなり、あまり問題となっていないようでした。

品質に関しては、最近まで収量確保が優先されてきたため、南米で最も品質が良いとされているアルゼンチンでも、栽培が粗放的で、世界の小麦品質標準から見ると劣っています。今後、輸出国としての地位を確保していくには、品質重視への方向転換が迫られているとのこと。ブラジルでも自由化政策の下では、高品質でなければ高価格で買ってもらえない状況となっています。パラグアイも生産は需要量に達しましたので、今後は育種や栽培法の改善により良質化を実現し、輸出を図りたいとしています。

いずれの国も発展途上という段階ですが、広大な土地や豊富な資源からみて、大いなる可能性を秘めた大陸という感じがします。

<服部 洋>